一〇〇一	長保三	七一九	上辞表・辞法務、号長谷僧正	僧綱補任	
		一〇一〇	賜封戸百烟、女院御賀御持賞、院司等内以加階	護持僧補任	
		一二二二	閏十二月、東三条院死去、四十歳、鳥辺野に葬送、陵は木幡の宇治陵と称す		
一〇〇二	長保四		この年、『源氏物語』執筆開始か		
一〇〇四	寛弘元	三一四	宸筆御講證義	深仙灌頂系譜・寺門伝記補録	
		八　三	解脱寺常行堂供養	本朝高僧伝	
		九一七	為尊親王のために加持	本朝高僧伝	
		三二五	春宮より馬を賜う	御堂関白記	
		五一九	仁和寺供養大般若の講師を勤む	御堂関白記	今井・手塚説
		八二八	道長故東三条院のために法華八講を修す證議者覚慶・観修	本朝高僧伝・御堂関白記	倫子両部曼荼羅等を仁和寺に供養
		九二八	敦康親王御修法（土御門殿）	御堂関白記	
		ウ九一五	道長清水にて初修善、道長明救、倫子観修	御堂関白記	
		一〇　三	中宮解脱寺常行堂供養のため観修	御堂関白記	本尊は阿弥陀仏か
		一〇二九	月修善のため権僧正観修	御堂関白記	
		一二　三	道長堂にて修善、大僧正観修カ？	本朝高僧伝	単なる修法の誤りか、前大僧正
		一二一三	中宮彰子のため石山寺で増益法を修す	御堂関白記	
		一二二三	中宮彰子のため石山寺で増益法を修す	本朝高僧伝	
一〇〇五	寛弘二	八　一	敦康親王御修法		
		一〇一九	左大臣道長浄妙寺建立	御堂関白記	
		一〇一九	定最勝講僧名で證義者覚慶・観修	本朝高僧伝	
		一〇二五	木幡浄妙寺別当	御堂関白記	
			木幡浄妙寺三昧堂供養の導師観修	本朝高僧伝	
			敦康親王のため石山寺で御修法	深仙灌頂系譜	
			浄妙寺検校		
一〇〇六	寛弘三	一二二九	紫式部出仕	御堂関白記	
		一〇二五	最勝講初、自堂定五僧に観修ほか	御堂関白記	今井・真淵・岡・手塚説
		一一　四	堂五僧来云慶、観修ほか	御堂関白記	法性寺五大堂の五僧か
		一二二六	法性寺丈六五大堂五大尊供養・大般若不断読経初、以前大僧正観修、於堂前修不動法	御堂関白記	
一〇〇七	寛弘四	三一九	前天台座主余慶門徒師の諡号の慶を申す、その中に観修	御堂関白記	
		四　九	長谷僧正観修許送少物	御堂関白記	
		一〇　一	道長第仏経供養の呪願観修	御堂関白記	
		一二　二	木幡寺多宝塔供養の證誠観修	御堂関白記	
一〇〇八	寛弘五	六一五	観修大僧正申、可置長谷阿闍梨由事奏聞	御堂関白記	
		七　八	卒、号長谷僧正修験者、諡号智静	僧綱補任・寺門高僧記	今井説
		九一一	敦成親王誕生		
一〇一〇	寛弘七		『源氏物語』完成か		
一〇一九	寛仁三	六中旬	贈諡号智静、号木幡大僧正	諸門跡譜	
	不明	一二一八	金峰山に如意輪を安置す	金峰神社文書	

【観修略年譜】

西暦	年号	月日	事項	出典	備考
九四五	天慶八		誕生	補任徳川本・四箇大寺古今傳記	
九五〇	天暦四		誕生	寺門高僧記・補任興福寺本	
九五四	天暦八		智弁権僧正（灌頂大阿闍梨）弟子5歳（余慶のこと）	寺門高僧記	
九八〇	天元三	六	東三条院懐仁（一条帝）出産		
		九 三	山門中堂供養右錫杖衆	深仙灌頂系譜	
九八四	永観二		補惣持院阿闍梨	寺門高僧記	
			住長谷解脱寺		
九八六	寛和二	三 二	拝智弁権僧正伝受阿闍梨位灌頂	寺門伝記補録	
		六	一条帝践祚		
		七 五	詮子皇太后		
九八七	永延元		道長陰語曰、我不得法力、難受大拝、願師加意焉、修諸之、……皆修之力也	元亨釋書	
九九〇	永祚二	五二六	任権少僧都（験者賞）、東三条院護持僧也	護持僧補任	
	正暦元	六 三	任（権）律師（主上瘧疾への加持・功験による）	補任・寺門高僧記	
九九一	正暦二	九一六	詮子出家太上天皇に準じ、女院号（東三条院）		
九九六	長徳二		補園城寺長吏	諸門跡譜	
九九七	長徳三	四	宋国送新書五部（法華示珠指・龍女成佛義・十六観経記・佛國荘厳論・心印銘）を議す	元亨釋書	
		七	任権大僧都		
			補園城寺長吏（大僧都）	僧綱補任	
九九八	長徳四	三 四	道長の病を祈る	寺門高僧記・園城寺長吏次第	治寺一年
		一〇二四	轉正大僧都	本朝高僧伝	
		一二二九	園城寺長吏再任	僧綱補任	
		一二二九	任権僧正	諸門跡譜	
		ウ三 二	権僧正観修為闍梨	僧綱補任	
九九九		五二三	従今夜初修善	御堂関白記	
	長保元	七二七	観修の童子明豪の童子と闘乱	本朝高僧伝	
		九三〇	三七日初修善（長谷）道長・権僧正観修	御堂関白記	
		一一一	太皇太后の御悩により不断法華御読経を修す	本朝高僧伝	
		一一六	千手観音法を修す	本朝高僧伝	
		一一七	敦康親王誕生		
一〇〇〇	長保二	一二二	道長生母忌日	御堂関白記	法華経一部斎食僧権僧正観修
		三二二	内裏にて千手観音法を修す	本朝高僧伝	
		四 五	僧正観修を以て法務とす	権記	
		四二九	僧正観修并明救闍梨両於壇修善	御堂関白記	
		八二九	任大僧正	僧綱補任・深仙灌頂系譜	

八について。

前章でも触れたのであるが観修には女性であるが故の罪と救済の意識は希薄である。藤壺の場合は源氏との隠された罪に焦点が絞られている。また物語が女性の宿世を問題にするのも、第二部の女三の宮と柏木との密通以後のことであり、この朝顔の巻の時点では物語意識の世界にはせり上がってはこない。それが物語の夜居の僧都が観修を準拠としているということとは自ずと別の問題ではあるのだけれど、一応指摘はしておく。

九について。

最初に掲げた拙稿「寛弘年間道長の道心と源氏物語」の中で、源氏の嵯峨野の御堂の準拠が道長の浄妙寺ではないかということを触れておいた。そうだとすると夜居の僧都は嵯峨野の御堂の別当だということになる。

源氏は

……「昔のためしを見聞くにも、齢足らで官位高くのぼり、世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわざなりけり。この御世には、身のほどおぼえ過ぎにたり。中ごろなきになりて沈みたりし愁へにかはりて、今までもながらふるなり。今より後の栄えはなほ命うしろめたし。静かに籠りゐて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べん」……

（絵合一〇）

と思って山里の閑静な土地に御堂を作ったのであった。冷泉王朝の後見人としての光源氏の栄華が、帝の父であるという秘密によって支えられ、拙稿でも触れたようにその罪障性を逆に照射するものとして嵯峨野の御堂があったのだとすれば、道長の栄華を護持僧の立場から支えてきた観修が浄妙寺の別当を勤めているということと一脈通じるものがあろう。

以上、総合的に考えてみると細かいところでの現実と物語との食い違いはあるようだが、観修を藤壺夜居の僧都の準拠として考えて良いのでなかろうか。そうだとすれば、私たちは夜居の僧都が源氏の嵯峨野の御堂の関係者である可能性を頭のどこかに置いて源氏物語を読んでも良いのかもしれない。

八

補注

一、以上、底本は『大日本史料』「寛弘五年七月八日」に引用された記事に拠っている。以下、同じ。

二、底本は昭和五二年、岩波書店刊『大日本古記録』本。以下、同じ。

三、底本は、昭和四〇年、臨川書店刊『増補史料大成』本。以下、同じ。

四、底本は、昭和四八年、臨川書店刊。以下、同じ。

五、『院家建築の研究』四四九～四五一頁、杉山信三著、昭和五六年九月、吉川弘文館刊。

六、底本は、昭和四七年刊、小学館本『源氏物語 二』による。以下、同じ。

くい。むしろ『元亨釋書』でいうところの一条帝の病について観修と覚縁が加持祈禱を行ったものと考えて良いのでないか。

四について。

一般的に法会や修法には願を立てるということは行われていたのであるが、念のため観修が法会でどういう役割を果たしていたのか、「願」と関係のありそうなものを拾ってみた。

A　長徳四年七月十四日「観修大僧都（観修）来臨、立願数多、……」（『権記』）

B　長保元年七月二十二日「……與権僧正（観修）同車至佛師康尚宅、以午剋始奉造可安置桃園寺大日如来、普賢十一面観世音二菩薩像、各一體、先康尚伐御衣木、認出尊像體奉立之、僧正啓白所願之趣、……」（『権記』）

C　同十二月十八日「……参宮（太皇太后宮昌子）……定七僧及百僧、七僧粥事等、……講師大僧都穆算、呪願権僧正観修、講師少僧都済信、……」（『小右記』）

D　長保四年二月十日「有御法事、以寝殿為御堂、……呪願前大僧正観修、導師僧正明豪、……」（『権記』）

E　同八月一日「故弾正宮御法事、於法興院被行、……講師大僧都厳久、呪願前大僧正観修、読師律師院源……」（『権記』）

F　長保五年十月十五日「於三條修亡室法事、呪願前大僧正（観修）……」（『権記』）

G　寛弘二年十月十九日「浄妙寺供養、……證者覚慶前大僧正、導師前大僧正観修、呪願大僧（都脱）定證（澄カ）……」（『御堂関白記』）

H　寛弘四年十月一日「……於堂供佛法、釋迦・薬師・観音・大威徳・毘沙門、已等身、観音・威徳・毘沙門・先年願、一尊并大般若去年冬願、……講師院源僧都、呪願前大僧正観修、読師明肇僧都、……」（『御堂関白記』）

Aは行成宅、Bは康尚宅にて願を立てたこと。C・D・E・F・Hの呪願は呪願師のこと。呪師・願師とも。供養会の時、呪願文を読む僧。七僧の一つ。堂の建立や修理の落慶供養の時、導師の願文について呪願文を読む役僧のことである。Cについて、昌子は十二月一日に既に崩じている。法事の七僧の呪願師として観修が決められている。Dは故東三条院詮子の七・七日の御読経である。Eは故弾正宮為尊親王の法事、Fは前年十月十六日に亡くなった行成の北の方釋寿尼の一周忌法要である。Gは浄妙寺供養において導師を勤めたこと。Hは道長第での佛経供養の時である。

物語では公のために願を掛けることが多かったという事であるが、観修の場合はやはり私的な法事の場面で願文を読むことが多かったのではなかろうか。

五について、紫式部が源氏を書き始めたのが長保四（一〇〇二）年、出仕が寛弘二年頃と考えられるから（注、一応、今井源衛説をふまえている）、観修は六十歳代の最晩年の時期に当たっている。また六について、長保三年に法務僧正を退いているという事以外、特別な記事は見当たらない。七については、前章で触れた『小右記』の正暦四年の記事が参考になろう。物語中で夜居の僧都は帝に源氏と藤壺との密通について触れる。護持僧としての役割はその家の秘密に触れるものがあるというのは当然のことであるが、それが観修については政界の覇者の道長家に関わったが故にその内容がドラマティックなものになったということも頷けるところである。

らひける僧都、故宮にもいとやむごとなく親しき者に思したりしを、おほやけにも重き御おぼえにて、厳しき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、いまは終りの行ひをせむとて籠りたるが、宮の御事によりて出でたるを、内裏より召しありて常にさぶらはせたまふ。このごろは、なほもとのごとく参りさぶらはるべきよし、大臣もすすめのたまへば、(僧都)「今は夜居などいとたへがたうおぼえはべれど、仰せ言のかしこきにより、古き心ざしを添へて」とてさぶらふに、……(薄雲一五)(注六)

ここで描かれる僧都の条件は

一、入道の宮の母后の代からの加持祈禱の密教僧であるということ。
二、故入道の宮も高徳の僧として信頼していたということ。
三、朝廷のご尊信も篤かったということ。
四、重大な勅願も立て、優れた聖僧であったということ。
五、七十歳前後であるということ。
六、今は自分の後生のために山に籠っていたのであるが、入道の宮のために山を下りてきていたということ。

そしてその僧都が

七、帝の出生についての重大な秘密、すなわち物語の主題として底流する源氏と藤壺との秘密に関知していたということ。

従って、

八、源氏との罪の故に地獄で苦患を受けているという。そこには女性なるが故の罪障意識は希薄であるということ。
九、源氏の嵯峨野の御堂の準拠が浄妙寺であること

なども指摘できる。

以上の点について、観修を夜居の僧都の準拠と考えることができるかどうか、一つずつ点検してみたい。

六

まず、一及び二について。

観修が東三条院詮子の護持僧として験力をふるい、それが認められて詮子ゆかりの寺である長谷解脱寺の別当となり、道長の北の方の倫子や娘の彰子など、道長家の代々の女方の修法などに出ることが多かったのは見てきた通り。後に道長一族の菩提寺である木幡浄妙寺の三昧堂建立をきっかけとして、浄妙寺別当になったということもここであげておいて良いかも知れない。

三について。

たとえば『本朝高僧伝』に掲げてある条項、すなわち長保元年十一月一日に太皇太后の御悩のために不断法華御読経を修したこと、長保二年三月十二日に内裏で千手観音法を修したこと、長保四年三月十四日為尊親王の加持に奉仕したこと、同八月三日に東宮より馬を賜ったこと、寛弘元年八月二十八日及び十二月二十三日に敦康親王の御修法を奉仕したこと、同年十二月三日に中宮彰子のために石山寺で増益法を修したこと、寛弘二年十月二十五日に敦康親王のために石山寺で御修法を修したこと、いずれもいかに観修が朝廷からの信任が篤かったかを示す記事である。序でながら長保二年八月十二日の『元亨釋書』の記事に、一条帝が法性寺の座主に實因を許さなかったために實因の霊が帝に憑いて、それを観修が調伏する話がある。『権記』の十一日の記事に「……自左府有召、参向、命云、此度病悩平癒、慮外事也、僧正観修阿闍梨覚縁等之恩無方酬、至于僧正、職位共極、亦無希望、……就中此度除病其験所致也、……」とある。道長が行成を召して観修と覚縁とをねぎらうものである。長保二年の四月二十九日と五月九日に道長が病気である記事はあるが「病悩」の主が道長であるとは考えに

藤原行成は道長と同じくやはり九条殿師輔の血筋で、観修に対する帰依は篤かった。『権記』によれば、長保四（一〇〇二）年十月十四日、行成家の出産に際して加持のために前大僧正（観修）と尋圓阿闍梨が呼ばれている。この時行成は三十歳。従って出産は行成の北の方と考えてよかろう。その女性は釋寿尼といわれる人で十月十六日になくなっている。その七・七日法要に呼ばれた七僧には前大僧正（観修）も含まれている。また、翌年十月十五日一周忌に際しても法要の呪願師の役割を果たしたのは観修であった。

このように見てくると、観修が当時の貴族の中でどの家に近かったかということがほの見えてこよう。

五、浄妙寺三昧堂との関係

寛弘二（一〇〇五）年、道長は以前にあった木幡寺を浄妙寺として、新築の三昧堂を供養する。その法会に前大僧正観修は導師を勤める。表白で道長は浄妙寺三昧堂建立の意図を「……此願非為現世栄耀・寿命福禄、只座此先考（藤原兼家）・先妣（藤原時姫）及奉始昭宣公（藤原基経）諸亡霊、為無上菩提、従今夜、来々一門人々、為引導極楽也、心中清浄、願釋迦大師・普賢菩薩自證明給……」

と言っている。

浄妙寺という寺名は観修が考えたもの。そして浄妙寺の別当になったのも観修である。浄妙寺三昧堂は法華三昧を行ずるためのものであり、そこに安置されていたのは表白にあるように釋迦や普賢菩薩であった。更に今まで藤原一族の墓所としての木幡寺があったわけだから、阿弥陀仏を祀る小さなお堂があるいはあったかも知れない。いずれにせよそれは本来的には三井寺系統の天台密教の正統を歩いてきた観修が浄妙寺の別当になるというのも不審は残るわけだが、観修が東三条院の護持僧のつとめを果たしたことがきっかけとなって、道長の特別の信頼を得ていたというのも以上見てきたように確かなことのようであるから、その観修が藤原一族の菩提所であるところの浄妙寺の責任者になっているというのも一応頷けるところといえようか。以後、浄妙寺の別当職は長く観修の門葉に属することになる。

六、法性寺五大堂について

しかし、観修の思想的根幹を考えると、本来的には法性寺五大堂との関係こそが注目されなければならないのである。法性寺五大堂仏像開眼供養に関して、史料は多くは語ってはくれない。それでも寛弘三（一〇〇六）年十月二十五日と十一月四日には法性寺五大堂の五僧のひとりとして前大僧正として院源等とともに観修の名前が上げられている。観修が六十四歳で亡くなるのは二年後のことで、その一年前から観修は病気勝ちであったということであるから、浄妙寺の別当職を最後として、本当の意味での第一線からは身を引いていたということなのかもしれない。没年は寛弘五年七月八日。諱は智静、木幡の大僧正と号した。

Ⅲ　藤壺夜居の僧都

藤壺の夜居の僧都が物語に登場するのは、入道の宮の七・七日の法要も過ぎてのことである。

御わざなども過ぎて、事ども静まりて、帝もの心細く思したり。この入道の宮の御母后の御世より伝はりて、次々の御祈禱（いのり）の師にてさぶ

から、新しい仏典を五部送ってくることがあった。『法華示珠指』二巻・『龍女成仏義』一巻・『十六観経記』二巻・『佛國荘厳論』一巻・『心印銘』一巻がそれである。朝廷は慈覚・智證の両系統の学僧にそれらの新書を批判させた。『元亨釋書』「釋観修」の長徳三年四月「是月」の条や『大唐國法華宗章疏目録』によれば、實因・慶祚・慧心（慧心院源信）・旦那（檀那院覚運）・静照・安慶・聖救らに交じって、観修も『法華示珠指』の下巻を論破したとされる。龍女成仏・転女成仏はいうまでもなく法華経の提婆達多品を思想的根拠とした女人救済の当時としては新しい思想的流れであったと思われる。観修は『龍女成仏義』に関わったわけではないのだけれど、宋の国から渡ってきた新しい思想書に対する姿勢が批判的であるということに象徴されるように、東三条院詮子の護持僧を勤め、道長家の女方を支える場面で登場するのであるが、それでも思想的には提婆品との関係での女人成仏に関してはあまり深く関わっているとは思えない。それはあるいは顕教としての天台の思想であるところの法華経を自分の思想の中核に据えるものではなく、彼が寺門系統の密教僧として自らの思想と行（ぎょう）とを構築していたということと関係があるのだと推測できるのである。このことは後で『源氏物語』の藤壺救済の問題に関係して触れる。

さらに彼が護持僧であるということに関係して『小右記』は面白い記事を掲げる。

三、『小右記』の記事

十四日戊戌　観修仿門来云、近書行東宮更衣［右大将済時卿女、］修法、猛霊忽出来云、我是九條丞相霊、存生之時、或□仏事或付外術、懇切致子孫繁昌之思、其願成就、就中小野宮太相國子族可滅亡之願、彼時極深、施陰陽術欲断彼子孫、所期先六十年、其験已新、今依滅（「滅」カ）他之思、受告（「苦」カ）極重、抜苦無期、小野宮相國子孫産時、吾必向其所坊、此事依存生心願、先所期六十年、其遺不幾、彼時外術今二年許也、其後可難廻此妨術、又此更衣已有懐任気、仍所来煩也、為断絶同胤云々、今聞此事、覚往古事、雖云骨肉、可有用心歟、仿門云、忽造大威徳尊、可奉帰依者、然者可任天運者也

（正暦四（九九三）年閏十月十四日）

東宮は居貞親王（後の三条天皇）のこと、九條丞相とは九条殿・坊城右丞相といわれた藤原師輔のこと、小野宮太相國とは、左大臣源高明を左遷し円融天皇の摂政となって小野宮殿と呼ばれた藤原実頼のこと、『小右記』の筆者実資は祖父実頼の養子となって小野宮家を嗣ぐ。東宮の更衣とは師尹の子の済時の娘で、三条の后の詮子ことである。これによれば観修が詮子の為に加持を行ったとき、九条の丞相師輔の霊が出て、「子孫繁昌のために神仏に願をかけた。中でも小野宮実頼の子族断絶の願をかけたためにその願は満たされたけれども、そういう願をかけた罪によって永遠に続く重い苦しみを受けている。いま東宮の更衣のお産に際しても同じく師尹（もろまさ）の子の済時の系統の子孫を断絶するためにこの場に現れた」というのである。事実実頼自身には子どもはなく、その後の歴史的展開ということでいっても師尹の系統の天皇が立つということもなかったわけだから、この観修の祈り伏せた九条殿の霊の噂は相当の重みを持って受け取られていたことであろう。しかもその内容は相当に際どいものであったということも護持僧がその家の秘密の核心に関わったということを示していよう。

四、藤原行成との関係

四

……永延元年、羽林中郎将藤道長陰語曰、我不得法力、難受大拝、願師加意焉、修諾之、二年、藤公遷黄門侍郎、正暦二年御史大夫、三年特進、長徴元年五月十一日、以羽林大将軍、為同中書門下平章事、六月右僕射、二年左僕射、平章事如元、不満十年據鼎鉉、皆修力也、……

と、道長が後の彼のとんとん拍子の出世ぶりを観修の法力によることだとしている。それが本当にそうであったかどうかはわからないが、いずれにせよ観修が護持僧として詮子に仕え、そのことで一条帝の時代が開け、詮子の引き立てにより道長が兄弟たちを押しのけて政界の中央に押し出されてくるというのであれば、道長が観修の力を評価したというのもうなずける。

そしてそのことは観修が、時姫・倫子・彰子など道長家の女方の仏教行事に関わって登場するということとも符合する。

A　忌日（藤原時姫カ）、依例以祢（弥）慧挙申経、法華経一部、齋食僧権僧正（観修）（『御堂関白記』長保二（一〇〇〇）年一月二十一日）

B　二十八日、……入夜参清水、初修善、余明救僧都、女方（倫子）前大僧正（観修）、雨通夜下、（『御堂関白記』寛弘元（一〇〇四）年九月二十八日）

C　十五日……従中宮（彰子）申（被送）前大僧正（観修）申常行堂料幡二十四料縫云々、（『御堂関白記』寛弘元（一〇〇四）年閏九月十五日）

D　二十七日、……於大僧正房候、中宮御修法也、（『権記』寛弘三（一〇〇六）年五月二十七日）

E　二十三日、自今夜一宮（敦康）御修法、前大僧正、伊與守出料物、（『権記』寛弘元（一〇〇四）年十二月二十三日）

F　二十八日、戊参宮、頗有悩御気、権僧正観修候加持、（『小右記』長保元（九九九）年八月二十八日）

G　一日、……宮重悩給由、忽有其告、……又重悩給、分手召遣僧正観修、僧都勝算、阿闍梨慶祚等……（『小右記』同年十一月一日）

H　十三日、……宮御修法今日結願、僧正観修也、……（『小右記』同年十一月十三日）

I　十八日、……参宮、講師大僧都穆算、呪願権僧正観修、……（『小右記』同年十二月十八日）

J　二十日、甲申余参皇后宮、昨日酉刻御出家、預其事者、大僧都覚慶、大僧都観修、阿闍梨慶祚、阿闍梨滲空也、……（『小右記』長徴三（九九七）年三月二十日）

Aは道長の母、時姫の忌日法要。Bは清水寺における修善。道長担当は明救、北の方の倫子の担当は観修。Cは中宮彰子より長谷解脱寺の常行堂供養の料として幡を送られたもの。Dは観修の房で中宮の御修法をしていたというもの。C・Dいずれも中宮彰子の関係のもの。Eは敦康親王の御修法に観修が関わっている。この時点では既に定子は亡くなり、また彰子腹の敦成親王は誕生していない。敦康親王は後見人の道長と彰子に面倒を見られていたわけだから、ここで観修が出てきてもおかしくはない。F・G・H・Iはいずれも太皇太后宮昌子の病気に伴う観修の加持である。道長家における護持僧としての実績が評価されたものか。昌子は十二月一日に亡くなっている。Jは皇后宮遵子の出家に関係した一人として。

ついでながら、観修は女人往生・龍女成仏の問題にはそれほど関心は深くなかったのではないか。長徴三年四月に宋の国の天台宗の学徒

綱補任、「静祐」諸門跡譜・元亨釋書)。智弁(余慶)に灌頂を受け阿闍梨となる。以後彼は天台の密教僧としての道を歩むことになる。

天元三(九八〇)年、東三条院懐仁(一条帝)出産。この時の護持僧を勤めたのが観修である。永観二(九八四)年補惣持院阿闍梨。寛和二(九八六)年、一条帝践祚、東三条院皇太后。永祚二(九九〇)年、任権少僧都。長徳二・三・四(九九六・七・八)年、園城寺長吏に補せらる。長徳三(九九七)年、任権大僧都。長徳四(九九八)年、転正大僧都。同、任権僧正。長保二(一〇〇〇)年、僧綱の長官である法務僧正に任ぜらる。同、任大僧正。長保三(一〇〇一)年、辞表を奉って法務を辞す。同、閏十二月、東三条院死去。翌長保四(一〇〇二)年、長谷解脱寺常行堂供養。寛弘二(一〇〇五)年、道長、木幡浄妙寺建立。浄妙寺別当として三昧堂供養の導師を勤める。翌寛弘三(一〇〇六)年、法性寺丈六五大堂五大尊供養に際し、堂前にて不動法を修する。寛弘四(一〇〇七)年、木幡寺多宝塔供養の證誠を勤める。寛弘五(一〇〇八)年七月八日、卒、号長谷僧正。諡号智静。六四歳。

一、東三条院詮子の護持僧として

観修は東三条院の護持僧として一条天皇出生の時にも伺候している。そしてそのことが東三条院のみならず、時姫・倫子・彰子など、道長家の女方の篤い帰依を受けることとなっている。

まず、東三条院詮子との関係について史料を見て行く。

『小右記』長徳二(九九六)年六月十七日の条に

……有僧綱召、大僧都覚慶、権大僧都観修、権少僧都明豪、両人僧都、女院御参(産カ)間縁有其験、超越被任云々、……

とあり、覚慶・明豪とともに東三条院の一条天皇出産に際して功績あったために僧綱に於て異例の出世をとげたことが記される。

明豪とは長保元(九九九)年七月二十七日、それぞれの童子の闘乱事件があった。

二十八日……権僧正(観修)自昨可行女院御修法、塗壇欲修、依僧都愁、被止御修法、権僧正壇壊退出云々、……(『小右記』)

とあるように、女院のための御修法をめぐって、両者の方法の相違からの争いであったようである。このことは明豪との関係に若干の翳りをもたらしたもののようである。

長徳四(九九八)年七月五日、女院のための護身を(『権記』)、長保元(九九九)年八月二十一日、女院の慈徳寺供養に際しては導師を勤め(『小右記』)、長保三(一〇〇一)年閏十二月二十二日の女院崩御の翌年、長保四(一〇〇二)年二月十日の七・七日の法要には導師の明豪とともに呪願の役を果たしている(『権記』)。また、長保六(一〇〇四)年五月十九日、道長の故東三条院詮子のための法華八講では天台座主の覚慶とともに證議者の役を果たしている(『御堂関白記』)わけだから、観修が詮子の護持僧としていかに大きな役割を果たしていたかが伺えるのである。長谷解脱寺が詮子ゆかりの寺であり(注五)、その寺の別当を任ぜられているというのも以上詮子との関わりを見てきた限りでは納得できるところである。そして道長を政界の雄として大々的にバックアップしたのが詮子であったわけだから、道長がいかに観修を高く評価していたかも想像のつくところである。

二、道長及び道長家の女性達との関係について

『元亨釋書』の「園城寺観修」に

二

藤壺の宮夜居の僧都と観修

工学部一般教育等　中　哲裕

Ⅰ　はじめに

これは平成六年十二月に風間書房から出版された『講座 平安文学論究 第十輯』の中で、「寛弘年間道長の道心と源氏物語～道長の御嶽詣で・木幡三昧堂・法性寺を中心に～」を書かせていただいたその論の中で書けなかったものの拾遺である。従って風間書房の論文とこのレポートの二つを併せお読み頂ければと思う。

源氏をはじめ多くの人々の痛惜のうちに藤壺の宮が崩御し、七・七日の法事もようやく過ぎて世の中に平穏が戻ってきた頃、藤壺の宮の夜居の僧都が冷泉帝に出生の秘密にまつわる源氏と藤壺の宮の関係を明かしてしまう。いうまでもなくこれは第一部における隠された主題なのだが、その夜居の僧都の準拠が道長を強力に後押しし、道長が後の藤原摂関制の頂点を極めるきっかけとなった姉の東三条院詮子の護持僧の観修ではなかろうかというのがこのレポートの趣旨である。

先ず、観修についてその護持僧としての人生を略述し、その後『源氏物語』中における夜居の僧都と観修とを比較検討する。

Ⅱ　観修について

観修について、『僧綱補任』・『元亨釋書』・『寺門傳記補録』などの仏教関係文献（注一）『御堂関白記』（注二）などにより、わかるだけのことを簡単な略年表として作成し（レポート末 付表、参照）、次いで特記すべきものについては『権記』（注三）や『小右記』（注四）なども資料として援用し、観修の護持僧としての人生を肉付けしてみた。

観修は左京に住まいする志紀氏の出身。両親が仏神に子どもを授かるように祈ったところ、夢の中で星の光が懐に飛び込んできて身ごもった子どもである。家人が戯れて海月を子どもの口に入れたところ、病気になり数日して口に瘡ができた。その形は海月のようであった。両親が驚き嘆いて「この瘡が早く治れば、この子を三宝に奉ろう」と誓った結果、その病がすぐに癒えたという。（元亨釋書）

五歳の時には、母親に従って不動と毘沙門の呪を誦し、一一歳の時、比叡山の静祐律師の許で出家（寺門傳記補録など、「故少僧都勢祐」僧